

S・ハウエル著

『社会と宇宙——半島部マレーシアのチェウオン族——』

Signe Howell, *Society and Cosmos: Chewong of Peninsular Malaysia*, シカゴ, University of Chicago Press, 1989年, xx+294ページ

富 沢 寿 勇

I

本書は半島部マレーシアのパハン州中部のチェウオン族における初の本格的な人類学的フィールドワークに基づく民族誌である。

チェウオン族は今日では、いわゆるマレー半島の先住民族でオラン・アスリ (Orang Asli) と総称される諸族のひとつに数えられる。1960年代後半から70年代にかけて発表されたテミアル族 (ベンジャミン [G. Benjamin]), セマイ族 (デンタン [R.K. Dentan]), パテック・ネグリト族 (エンディコット [K.M. Endicott]), スメライ族 (モハマッド・フッド・サレー [Mohd. Hood Salleh]) などの、他のオラン・アスリ諸族研究の諸成果が本書では適宜、比較の対象に据えられつつ、従来、断片的な調査資料を除けばほとんど報告のされなかったチェウオン族についての、地道ながら着実な研究報告が展開されている。

著者はチェウオン族において最初のフィールドワークを1977年9月から79年6月にかけての期間中、実質17カ月間かけて行ない、これを基礎にして、同調査を勧めたR・ニーダム (Rodney Needham) 教授の指導の下に博士論文を書き上げ、80年末にオックスフォード大学に提出した。本書はそれを基礎に、1981年秋に約3カ月間かけて行なわれた再調査の成果を追加して、84年にオックスフォード大学出版局から刊行されたものに、新規に89年版の序文が加えられてシカゴ大学出版局から再刊されたものである。

まず本書の目次構成の概略を紹介すると以下のとおりである。

序論

第1章 人々

第I部 関係

第2章 個人間の関係
第3章 異性間の関係
第4章 人間と超人間の存在

第II部 意識と相対性

第5章 ルウェアイ
第6章 意識の他の諸相
第7章 知覚における相対性

第III部 規則と分類

第8章 行動を支配する諸規則
第9章 分類
第10章 結語

以上のような3部構成による10章立てになっている。巻末には本論の展開と密接に関わるチェウオン語の語彙65語のリスト、および付録としてチェウオン族の18種の神話と葬歌、コンピュータで分析処理された40種の動物名リストや分析結果の図表、文献表および索引が付されている。特に本書の主要なトピックが宇宙論にあり、本文で依拠される素材として、チェウオン族の神話群に言及される比重はさきわめて高いことは銘記しておかねばならない。その意味で、付録にある18種の神話群は25ページを割いて収録され、それぞれ資料として興味深いものであるのだが、これらの神話の出所あるいは情報源や、民俗知識としての流布の程度などについては何の言及もされていないに等しいのが惜しまれる。なお著者はチェウオン族において合計約80の神話を採集したというが、より詳しい資料は同一著者によって別途に刊行されていることを参考までに付記しておく (*Chewong Myths and Legends*, Monograph No. 11, クアラルンプル, MBRAS, 1982年)。

II

チェウオン族は著者の最初の調査終了時の1979年6月現在、東部地域に131人、西部地域に115人の人口から成っていた。著者は奥深い熱帯雨林のクラウ鳥獣保護区 (Krau Game Reserve) に住む東部地域のチェウオン族 (東チェウオン族) を中心に集約的調査を行ない、西チェウオン族については、フィールドワークの期間の最後の約1カ月間滞在した。東チェウオン族と西チェウオン族は互いに相手の存在を知ってはいるが、ほとんど接触はないという。いずれも狩猟・採集とタピオカなどを中心とする焼畑農耕を主たる生業の手段としている。

フィールドワークの最中も、またデータを分析・整理する初期的段階においても、著者に若干の落胆を与えた

『アジア経済』XXXII-9 (1991.9)

ことは「人類学者がその民族誌において一般に提示するような特質」(1ページ)がこの社会には欠如しているということであった。換言すればリニージや縁組体系もなく、社会階層や政治組織らしきものもなく、複雑な儀礼もほとんどなく、総じて社会組織や儀礼組織に明示的構造が欠如していることであった。このような落胆は、著者が構造主義人類学の御大であるニーダムの学生であったことを考慮すれば道理であるとも思えるが、あらためて考えてみると、この種の「明示的な構造の欠如」は、ひとりチェウオン族の研究者に限らず、むしろ他の多くの東南アジア諸社会(いわゆる双系的な平地民を含めて)の研究者たちを共通に悩ませてきた課題であるといった方がよいのかもしれない。その意味で、著者が上述のようなチェウオン社会のネガティブな側面を、ポジティブで意味のある特質と積極的に見なして、分析の対象とするように頭を切り換え、「データの命ずるままに、自らのアプローチをとる」(3ページ)方向に自らを統御していく具体的過程は、他の東南アジア諸社会の研究者にも大いに参考となるう。

III

以下では順を追って、各章の論旨を見ていくことにしたい。

まず第1章ではオラン・アスリ諸族のなかでのチェウオン族の人種のおよび言語的位置づけや、かれらと部外者との接触による初期的資料、チェウオン(シワン: Siwang)という民族名の由来、かれらの居住地と生態環境、生業経済と食生活、親族・婚姻制度に関わる情報を中心とした一般民族誌的な背景が記述される。

これに続く8つの章は、上述したように、「関係」(relations)、「意識」(consciousness)、および「規則」(rules)をそれぞれ主題とする3部構成になっており、いずれも著者がフィールドで、また、分析の過程で、チェウオン族の間に見られる社会的相互作用や観念に関わりを深めていく過程で、かれらの思考様式を洞察していくための重要な鍵概念として浮上してきた、相互に密接に絡み合った主題群でもある。

第I部はあらゆる領域の関係、つまり社会レベルでは諸個人同士の、あるいは男性と女性との、さらには人間と超人的存在との、あるいは、さまざまなタイプの超人的存在同士の関係が扱われている。

まず第2章では諸個人間の社会関係を規定するさまざまな価値観が考察されるが、その出発点として、チェ

ウオン社会における攻撃性や競争意識の欠如や社会階層の不在が指摘される。

第3章では男女間の関係においても平等主義の原理が支配的であることが論じられ、民俗的生殖理論においても男女の相補的關係が強調されていることが示される。たとえば、かれらの間に指摘しうる「擬媵」(couvade)も、そのような脈絡のなかで解釈しうることも示されている。

第4章は、本文中で67ページともっともスペースが多く割り当てられている章であり、人間とさまざまな超人的存在との関わりや、超人的存在同士の関係性が考察され、いずれにおいても、やはり平等主義の原理が支配していることが主張される。すなわち、人間社会のレベルにおいてと同様に、いかなる超人的存在も互いに他との関わりにおいて優劣の関係にはなく、地位や力の分化の観念が見られないとする。

このように第I部で考察された多様な諸関係に一貫して横たわる観念として、階層制の欠如が指摘され、さらに、多数の超人的存在を含めた意味での広義のチェウオン社会には、相対的な地位の分化や物事の達成における競争が見られないことが主張される。

第II部ではチェウオン族の存在論が、意識の観念を詳細に吟味する方法によって探求されていく。すなわち、かれらは人間というものをどのようにとらえているのか、人間の自我(self)や人格(person)をどうとらえているのか、またそれが人間以外の生物や超人的存在とどのように関係づけられているのが考察される。

「意識」についての議論は、第5章におけるルウアイ(ruwai)という民俗概念の考察から始められる。これはモン・クメール系の言語を話す、他のオラン・アスリ諸族の「靈魂」に比定される諸概念(たとえばネグリのロワイ[ro-wai]、テミアル族のルワイ[rewai]、セマイ族のルアイ[ruai]、ジャーフット族のルアイ[ruai]、ムンドウリック族のルワイ[rewai]など)と共通の地平にあると見なしうる概念である。チェウオン族のルウアイについては、主に3つの意味があると分析される。第1は「生命原理」として人間、動植物、超人的存在などのすべての「生きもの」を貫くものとしてである。第2は、第II部の主題にもなっている「意識」または「人格性」とも訳しうる場合で、この意味でのルウアイは、すべての人間と一部の動植物や非生物にしか見られない。このルウアイ概念については、レーナルト(M. Lenhardt)によって報告されているメラネシアのカナック族の人格概念(kamo)などとの類似性が指摘されてい

る。ちなみにレーナルトの著作は最近邦訳も出ており、比較して読むのも面白いであろう（モーリス・レーナルト著 坂井信三訳『ド・カモ——メラネシア世界の人格と神話——』せりか書房 1990年）。ルウアイの第3の用法は、より限定的なもので、守護霊のひとつのタイプとして用いるものである。

個人のルウアイの役割を理解するために、第6章は人間のみに焦点を絞り、人格性を構成する他の諸相としての身体、亡霊、匂い、肝臓、名前の問題が併せて検討され、身体とルウアイとの連結関係が示される。

続く第7章ではチェウォン族の知覚についての考え方が明らかにされる。まず「熱い眼」と「冷い眼」という二分法が指摘され、前者は人間と、後者は超人間的存在と関連づけられる思考があるとする。「冷い眼」はさまざまな事象の実相を見抜く能力をもち、病氣治療とも関連する。人間のなかでもとりわけプタオ (putao) と称する呪医＝シャーマンは秘儀的な知識を備え、超人間的存在と交渉するもので、「冷い眼」を備えているとされる。一方、人間をその一部として含む、さまざまな意識をもつ存在は、それぞれ互いに多様な知覚をもつ、すなわち「異なる眼」を有するという知覚の相対性に関するチェウォン族独特の観念が提示される。

第Ⅲ部では、チェウォン族の行動を個人レベルおよび社会レベルで支配しているさまざまな規則の意義が検討され、最後にかねらの分類原理が議論される。

第8章では行動を支配する多くの諸規則が具体的な民俗概念を列挙して説明されている。すなわち、タライデン (talaiden)、プネン (punén)、パンタン (pantang)、マロ (maro)、トラー (tolah)、マリ (mali)、トレッグ (tolæg)、ティカ (tika)、タンコ (tanko) などである。たとえばタライデンは動物を笑うことを禁止する規則であり、これを破れば雷鳴を伴う嵐に襲われると信じられている。この動物を笑うことのタブーは、スキート (Skeat) 以来、多くの人類学者たちが関心を寄せてきたテーマでもあり、セノイやネグリトなどの、他のオラン・アスリ諸族にもきわめて似た形式のものが広く報告されている。一方、他集落からの訪問者に対し食糧を与えることを義務づける規則があり、これが破られれば病氣や死がもたらされる、などとするマロの観念や、口笛を吹いたり足を揺すったり、ある状況下で叫んだりすることを禁じるマリの規則は、チェウォン族特有のものとなる。

これら諸規則の分析を通して、著者の4つの命題が提示される。第1は、これらの規則がチェウォン族の宇宙

観の重要部分を構成していることである。なぜなら、これらの諸規則は、神話や超人間的存在についての知識とともに、チェウォン族の環境、社会、文化についての知識体系を構成しているからである。規則の違反に対しては、超人間的または非人間的存在によって罰が与えられ、それによって日常生活が直接に脅かされる。チェウォン社会において法的・政治的機構が不在であることのひとつの理由は、このような宇宙論に根ざした規則群がその代替機能を果たしていると考えられることも併せてここでは示唆されている。

第2の命題は、諸規則は病氣その他の不幸についての災因論を構成していることである。逆にいえば、規則が遵守される限り、不幸や災難はまぬがれるはずであるという民俗理論が働いているということである。第3の命題は、規則の多くが、異なる事象同士の混合（たとえば異なるタイプの食物の混合）を禁止していること、あるいは、ある種の異なる範疇や活動を正しく分離して行なうように規定していることである。これは本書の結論部分で展開される「分離の原理」(principle of separation) の議論につながる主張点でもある。さらに第4の命題として、諸規則によって禁じられた行動をつぶさに検討してみると、多くの場合、感情を抑制することが顕著に強調されている一方で、恐怖心や恥の感情表現は、むしろ積極的に奨励されている事実が判明するという、チェウォン族の民族性を示す側面が論じられる。

第9章ではチェウォン族の思考様式における分類の原理が、読者としてのニーダムを十分に意識しながら探求されているように思われる。ただし、その研究過程でも著者は終始、実証主義的態度を失わぬよう努めている。著者は、分類 (classification) には3つのタイプがあるとし、範疇化 (categorization)、分類法 (taxonomy)、命名法 (nomenclature) を峻別することが重要であると述べる。範疇化とは、著者によれば、ある類 (class) の構成諸要素がひとつ以上の共通の属性を分有する場合をいい、分類法はこの範疇化の特殊なケースで階統性 (hierarchy) が存在するものをいう。一方、命名法とは、ある類の構成要素群が共通の属性を特に分有せず、単に共通の名称が与えられているにすぎない場合を指す。そしてチェウォン族に主として見られる分類原理はこの命名法にすぎないとする。この主張はさらに念のため、コンピュータによる要素分析も援用されて、その証明が試みられてもいる。こうして「自然」と「超自然」を含む環境全体についてのチェウォン族の認識においては、階統化された秩序づけや、根底を貫く構造原理は必ずしも存

在していないことが結論づけられている。

IV

以上が全体の骨子であるが、一連の考察の過程において首尾一貫して強調されるのは、チェウオン族にとっての社会(society)とは、かれらにとっての宇宙(cosmos)と外延を共有するものであり、このより広い社会的宇宙はチェウオン人口の総計からのみ構成されるのではなく、さまざまな人間以外の動植物その他や超人的存在をも含むものであり、かれらの日常の行為や発話を真に理解するためには、この社会的宇宙を考慮する必要があるということが示唆されている。本書の表題が含意しているのも、まさにこの点にある。この社会的宇宙は、人間同士、および、人間とさまざまな範疇の超人的存在との間での物質的または非物質的な贈与と交換の過程を通じてその存続が保証されるものである。したがって、同社会における狭義の経済現象を把握することを目的とする読者も、かれらの広義の社会的宇宙とその存在論に根ざした広義の交換体系の理解が前提条件として要求されることになる。

互いに外延を共有すると考えられる「社会」と「宇宙」の関係は、「世俗的領域」と「宗教的領域」の関係としても換言される。著者は、人類学における儀礼の一般的定義では、儀礼的活動は日常的・実務的活動とはどこか性質を異にするものととられるが、チェウオン族についてはこのような区別は存在しないとしている。すなわち、超人的存在は世俗的活動のなかに直接導入されるし、世俗的活動は人間と超人的存在との関係が表現され維持される主要な媒体をなしているということである。確かに著者の指摘するとおり、儀礼に関する人類学的報告の大半は非日常的に行なわれる儀礼に関するものが多いかもしれないが、著者が主として眼を向ける、日常的な身体技法や行為規則を含む、いわば「世俗的儀礼」の領域の記述は、むしろ民族誌作成の原点であるべきである。これを堅実に実践している著者にとっては、人類学者の垂涎を導くような「複雑な儀礼」が特に見出せないチェウオン社会を選択したことが、かえって功を奏したのではなかろうかと評者には思われる。

本書全体の基本的トーンは、いわゆる比較的「孤立した小規模社会」という古典的人类学のモデルに準拠して書かれたものであるという印象は強い。チェウオン族と他のオラン・アスリ諸族やマレー人その他の異民族との文化的・社会的関係や交渉は要所要所で言及されている

が、チェウオン族の「社会」はあくまでもチェウオン族(全体あるいは一部)のみから構成される人間集団と動植物や超人的な存在を含むかれらの精神世界に限定されている。その方法論的戦略によって著者はかれらの「社会」と「宇宙」の全体構成を読者の前に比較的整然とした形式で提示するのにどちらかといえば成功しているといつてよい。こうして究極的には、チェウオン族の観念と行動を貫く原理としての「分離の原理」を結論として抽出している。ただ、この「分離の原理」に関しては、民族誌的データとしても、論理的な説明のレベルでも、若干不明瞭な領域が残されているように思われる。それは特にタンコという、いわゆる近親相姦・近親婚禁忌と関連する観念をめぐって指摘できる。

チェウオン社会では、兄弟姉妹間の性交渉・婚姻は禁じられるほか、親子間や男性とその兄弟の娘、あるいは父方オジの娘との性交渉・婚姻はタンコとして知られる禁止行為である。この観念は同名の超人的存在タンコ(Tanko)に由来するもので、この禁を犯した者はタンコ神によって雷電に打たれて関節節がこぼり、さらに禁止行為が続けば死の罰が与えられるというものである。チェウオン族の考えでは「同じ血を混合すること」を回避することが要求される。こうして、同じ精液から生れた人々、同じ母乳で育った人々は分離されねばならず、同一の流動体から結果したものは分離されるべきであつて、再統合することは許されないという「同類のものを分離する原理」を著者はチェウオン族の思考と行動のなかに読みとり、先に示した「異質のものとの混合を避ける原理」との共通原理として、つまりより高い抽象レベルでは「分離の原理」が働いていると主張するのである。

ところがこの原理をチェウオン社会の(部族)内婚傾向との関係で照らし合わせると未解決の問題が残されている。チェウオン族は通常は内婚的であるというが、特に東チェウオン族は東チェウオン族内部での婚姻を理想としており、西チェウオン族を婚姻対象から除外しているという。一方、西チェウオン族は、より包括的に、隣接する他のオラン・アスリ諸族(テムアン族、ジャーフト族など)を通婚圏の範囲に含めていると考えられるという(28ページ)。著者はさらに「奇妙なことに、理想的配偶者についての質問を執拗にしていくと、あらゆる内婚的婚姻は、理論上、タンコとされることが明らかになった」と記している。具体的にはジャーフト族やテムアン族あるいはゴブ(マレー人などを指す)との婚姻の方が部族内婚よりも好ましいというの

であるが、この記述部分が東チェウオン族について述べているのか、西チェウオン族についてなのか、あるいはチェウオン族全体に言及しているのか、必ずしも明確でない。ただ上記の事実から考えれば、東チェウオン族にとっての「社会」と西チェウオン族にとっての「社会」とは若干の乖離が推定されるのであり、この点の著者の見解が明示されていないのは残念である。また、東チェウオン族の間では婚姻可能な女性が慢性的に不足しているにもかかわらず、過去5年間で他の諸族から妻を迎えた事例はわずか3件であって、部族内婚が強く選好されていることを示している。部族内婚をタンコとする発想が、仮りに東チェウオン族のインフォーマントによるものとするなら、それは現実と矛盾する理念であって、確かに著者のいうとおり「奇妙」な民族誌的事実ということ

になり、これは未解決のままである。さらに論理的レベルでは、部族内婚と部族外婚という対立図式において、「同類の混合」とも考えられる前者がタンコ観念につながるとすれば、「異類の混合」とも考えられる部族外婚は「分離の原理」には抵触しないのかという素朴な疑問も生じてくる。

以上のように幾つかの疑問点は残されるが、総括的に見れば本書は堅実なフィールドワークに基づいたデータを基盤に、辛抱強い分析とよく組織された構成で書かれており、読者を十分にわかりやすくチェウオン族の世界に誘ってくれる。本書によって、マレー半島のオラン・アスリの資料が質量ともにまた厚みを増したことは疑いない事実であろう。

(静岡県立大学助教授)